HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代日本における拓殖教育の展開と「植民者」像［全文の要約］
Author(s)	大熊, 智之
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12505号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65738
Type	doctoral thesis
File Information	Tomoyuki_Ohkuma_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 27 年度　博士学位申請論文（要約）

近代日本における拓殖教育の展開と「植民者」像

大熊智之

本論文は、近代日本の拓殖教育という場において、人びとが「植民」という営みをどのように理解し、理想的な「植民者」像をどのように描いていたのか把握することを目的とする。なお、本論文においては、移植民者の養成教育を拓殖教育、その目的で設立された学校を移植民学校と称する。

序章において上記の課題がどのような問題意識にもとづくものであるのかを敷衍した。そこで指摘したのは以下の諸点である。まず従来の移植民史は植民地空間を中心に把握されてきた。その結果入植後の植民者をめぐる研究の隆盛に比して、内地を発つ前の植民者への関心は希薄であり、成果に乏しい。特に近代日本社会では「植民者」とはどのような者である（べき）と考えられていたのか、そして当事者が自らの実践する「植民」という営みをどのように理解していたのか、というすなわち「植民者」像をめぐる問題には残された課題が多い。「植民」を志望する者たちがそれらの「植民者」像をどのように受容し、あるいは反発しながら入植を決意したのかを解明する必要がある。移住者による自己認識は、彼らの植民地進出の経緯を探る上でも、進出後のふるまいを理解する上でも重要な手がかりになると考えるからである。以上が本論文の基本的な問題関心である。

次に、近代日本の「植民」概念と「植民地」概念について整理し方法論的な示唆を導き出した。従来、戦後の植民地研究は新渡戸稲造の方法論を継承してきたとみてよい。そのため「植民」を政治的従属関係によって定義される「植民地」という空間と一体不可分のものとする傾向があった。その結果、植民地空間における経済活動や統治政策に関する研究が蓄積される反面、そこに収まらない「植民」の多様な諸側面に対する注目はあまりなされない傾向があった。しかし、〈「植民」から「植民地」を見る〉矢内原忠雄の方法論を参照するとき、「植民」という営みは政治的従属関係による「植民地」という空間にのみ限定されるものではなく、むしろそのような空間的な制限になじまないことにこそ特徴をみいだせることに気付く。「植民」が営まれる場所はそうした植民地にとどまるものではなく、植民政策は植民地政策とは限らないのである。このように、「植民」と「植民地」とのあいだに存在するズレに注意することによって、空間的な制約を受けない視点を獲得することができる。すなわち、一つには、いわゆる日本の勢力圏ではない土地への移動をも視野に入れた植民研究である。これは移民研究と植民研究のよりいっそうの接近ということでもある。もう一つは、入植前あるいは引き上げ後の植民者への着目である。「植民」は植民地に入植した状態でのみ行われるものではない。本国における事前の教育やあるいは場合によっては引き上げ後の活動まで含めて「植民」という営みを全体的に考える必要があるの

ではないだろうか。

そこで、本論文では「植民」とは何か、目指すべき理想的な「植民者」とはどのような者と考えられていたのか、それを移植民のための人材養成教育の場から検証することにした。戦後における拓殖教育をめぐる研究では、国家による教育への関与を問題にする教育史的な関心から、1930 年代後半以降の国策移民の養成を担った学校を主に取り上げて、その政策的意図や教育実態を解明する研究が主に行われてきた。しかしすでに 1930 年代前半までには、東京を中心に移植民学校が設立されている。よって本論文では、これまで十分に明らかにされてこなかった1920年代までの時期に拓殖教育がどのように展開したのかを跡付け、そこで提示された理想的な「植民者」像とはいかなるものだったのかを明らかにすることを課題とした。

以下、各章で明らかにしたことを概観する。

第 1 章「北海道開拓と人材養成」では、拓殖教育史の前史として北海道開拓の人材養成について検討を加えた。札幌農学校が存廃の危機に瀕したとき、学校の教授兼幹事だった佐藤昌介が提出した「北海道殖民地ニ農学校ヲ必要トスルノ意見」を手がかりとした。その中で、英国の「殖民学校」を引き合いに札幌農学校の存在意義を説いているからである。彼によれば、札幌農学校で教育を受けた者は、北海道の「殖民者又殖民地ノ官吏」たる「最モ完全ナル資格ヲ具備スルモノ」といえる。したがって北海道開拓には札幌農学校が必要だというのである。これまでの研究では、この意見書は、札幌農学校が屯田兵将校となるべき人物を供給しうる「殖民地ニ必要ナル文武官ヲ養成スルノ学校」となりえると佐藤が強調したものとしてよく知られてきた。しかし佐藤が「文武官ヲ養成スルノ学校」にすべきとの主張に続いて、札幌農学校を「殖民学校」としてアピールしたことについては分析されてこなかった。佐藤が札幌農学校を「殖民学校」と認識する意図はどのようなものだったのだろうか。

佐藤がこの意見を提出した背景には、高等教育機関の文部省への一元化問題があった。佐藤はまず北海道が日本の産業の中心たる農業に多大な貢献をしていることを力説し、北海道開拓の必要性を訴えた。その上で、具体的に札幌農学校が北海道開拓になぜ必要なのかを二つの事例を通して説明した。それは第一に屯田兵の将校養成の役割を担えるということであり、第二は、北海道の「殖民者」の資格を備える人材を養成することができるということであった。これら二つは、佐藤が北海道開拓を二期に分けて分析したときの、第一期と第二期の目的にそれぞれ対応していた。すなわち、第一期はロシアを念頭においた北方の防衛であり、第二期は富源の開拓である。佐藤はもはや北海道開拓の趨勢は富源の開拓であることを認めながら、だからこそこれからの屯田兵将校は農業の知識がなければならないと訴えたのである。そのとき開校以来兵学を教授している札幌農学校はその教育に最適の施設だった。他方、富源の開発という点でいえば、佐藤はイギリスの「殖民学校」の役割を札幌農学校が担えると主張した。すなわち、佐藤は植民者に必要な資質として、植民地の風土地理産業についての深い知識を要求したのである。北海道に居住しながら

日々身近に北海道の風土地理を観察することができる札幌農学校は、その養成に最適に学校だと主張したのである。以上のような佐藤の主張を通して、国防と富源開拓がこの時期の植民者が担うべき役割だったことがわかった。

第 2 章「拓殖教育論の勃興――日本人論を中心に」では、拓殖教育論がどのように興り、そこでは何が議論されていたのかを検討した。拓殖教育論は 1900 年を前後する明治後期に勃興した。この時期に登場した拓殖教育論は従来、帝国主義教育の一段階として位置づけられ、日本の植民地支配のための教育論と理解されてきた。たしかに、日清戦争後に獲得した台湾での経験をもとに、台湾で活動する実務家から盛んに拓殖教育論が提起された。しかし他方、この時期の拓殖教育論にはそれとは異なるもう一つの議論があった。それは日本人論のかたちで論じられた拓殖教育論である。本論文では、具体的には 1900 年ころから韓国併合期までの〈日本人論としての植民論〉と、当時の代表的な論者であった竹越与三郎および志賀重昂の拓殖教育論に分析を加えた。

その結果、明治後期、盛んに論じられた〈日本人論としての植民論〉のなかには、歴史を参照しながら日本人の「殖民的国民」としての資質の自信を深める論じ方と、北米の日本人移民の現状と西洋の植民先進国との比較の中で日本人の資質に不安を提起し、国民性の改良を目指す論じ方があったことを見出した。これらの議論は、植民地と移住地を横断し、またときに二つの論じ方を接続しながら、理想的な「植民者」像をさまざまに構成していたのだった。「植民」をめぐるこうした言論状況のもと、拓殖教育論が、北米の日本人移民の現状への対処法を西洋の植民先進国を参照して導き出す植民論のなかから生じたものであることを指摘した。

こうした出自をもつ拓殖教育論の特徴の第一は、常に欧米との比較が意識されていたことである。日本人植民者の主たるライバルと考えられていたのは植民地で活動する西洋人であったし、国民性を改造するための施策も欧米諸国の植民経験を参照して獲得されたものだった。アメリカ人による日本人評を参考に課題を抽出し、イギリスの施策を参考に解決策を提言する「里山」の拓殖教育論は象徴的である。同時に、当時の拓殖教育論を構成するもう一つの要素は日本への内省的な視線である。ときに日本民族の歴史を振り返りながら自信を深め、ときに欧米を参照しながら教訓を得ることで自らを省みようとした。したがって、植民地原住者への視線がほとんど見られないことがこの時期の日本人論として展開された拓殖教育論の第二の特徴であったことがわかった。

第 3 章は「日本の植民地拡大と『植民者』像」では、台湾協会によって 1900 年に設立された日本初の移植民学校である台湾協会学校の拓殖教育について検討を加えた。台湾協会学校はその後名称変更を重ねるので、本論文では「拓殖大学」と表記する。「拓殖大学」については、従来の研究によってその「植民学校」としての性格が指摘されてきた。そこで本論文では、「植民学校」としての「拓殖大学」の変遷をたどり他の移植民学校との関係も考慮しながらその拓殖教育の特色を明らかにすることを課題とした。その結果明らかになったのは以下の諸点である。

第一に、「拓殖大学」はもともと植民思想と植民学を教育の柱に置く「植民学校」として構想されこと、しかし外交上の配慮から「植民学校」であることを積極的には標榜しなかったことを指摘した。そもそも「植民学校」が構想されたのは、日本国民の「殖民思想」すなわち海外雄飛する精神の欠如に対する問題意識からであり、「植民学校」であるゆえに、どの方面への進出にも対応できる教育が目指されていた。朝鮮金融組合の初代理事に卒業生があてがわれたのも、「植民学校」のそうした一面が評価されてのものだったといえる。また「植民学校」として人材供給の期待に応えるため京城分校を開設したことも特色といえる。卒業生の多くは官吏として統監府の政策を遂行する職に就いた。植民地における末端の実務者を養成する学校だったのである。

第二に、東洋協会植民専門学校と改称することになった背景に他校との競争関係があったことを具体的に明らかにした。第一次大戦がはじまりもともと移植民学校として設立されたものでない他の学校も拓殖教育に力を入れ始めた。そのような状況のなかで専門教育を強調する狙いから「植民」の二字を校名に挿入することになった。教育内容の充実も図られ、語学の増強および、植民学関連の科目も新設され「植民学校」としての教育を強化した。また同様に他校との競争関係から卒業生への評判にも敏感になり、精神的な修養の重要性が改めて強調され、それを担保する厳格な寄宿舎教育が特徴だった。

第三に、しだいに「植民学校」としての教育の充実と、学生たちの志向とにズレが生じていったことである。第一次大戦後、中国大陸との通商活動への従事を志望する学生が増加すると、台湾語・朝鮮語という植民地の言語は人気がなくなり、廃止に至った。また、学生たちには植民政策を念頭に置いた教育に対する不満と、中国を対象とした経済的・通商的な教育内容への要求が高まり、教育が「時代錯誤」であるという批判に直面した。時代状況の変化にともない、「植民学校」としての構想自体が学生の求める教育との間にズレを生じざるを得なくなっていたことを示したものといえるだろう。

第 4 章「南米移民の人材養成と『植民者』像」は、1918 年に設立された南米移民養成を目的とした初の移植民学校である海外植民学校の拓殖教育と、創設者である崎山比佐衛の移民論および実践について検討した。まず、第一次大戦後の海外植民学校創設当時には拓殖教育へ期待する社会的な気運が広く存在していたこと、政財界や学術界の支援を得て、南米移民養成教育を主眼とした移植民学校の先駆けとして、海外植民学校が設立に至ったことを示した。

次に、海外植民学校の拓殖教育の特徴について検討した。海外植民学校が理想とした「植民者」像は知識と品性と宗教的な素養を兼ね備えた「ボス」であり、その養成のためには、キリスト教主義教育と労働主義教育が必要であると考えられた。さらに、学校の掲げる永住的な「植民」の理念を具現化したものとして、女子教育に積極的に取り組んでいた点も特徴的である。では、学校のそうした教育理念を学生たちはどのように受け取っていたのか。ストライキ事件を分析することで、すべての学生に受け入れられたわけではなかったことを指摘した。また崎山のアマゾン入植後は、それまで学校が守ってきた教育理念が大

きくゆらぎ、南米移民養成教育に特化した教育体制が変容してゆくことも明らかにした。それは、ブラジルの移民受け入れ体制の変化と満洲移民の主流化という拓殖教育界をめぐる状況の大きな変化の前に、学校の進路を模索した結果であった。

次いで、北海道への入植経験と満洲認識が崎山の移民論の形成やその実践にどのような役割を果たしたのかを検討した。崎山が北海道開拓経験を通して学んだのは、現地住民の尊重という理念と開拓労働学校構想であった。後者は、信仰と労働と学問の統一という理想を崎山に与え、彼は生涯その実現を目指すこととなった。次に、崎山は満洲を日本人の移民先としては適切でないと考えていた。移住先を「人文的植民地」と「自然的植民地」に分類し、満洲を前者、ブラジルを後者と考えた彼は、満洲視察以後かえってブラジル移民への思いを強くし、彼の移民論もその理念が深まりを見せた。それは政治性や経済性を否定し「絶対の自給自足」をモットーとした「真の植民者」を目指すものとなった。彼はブラジル移民を「平和の戦士」と位置付け、南米移民の養成にこだわり、自らもアマゾンに入植して「真の植民」を実践したのだった。

第 5 章「北海道と拓殖教育の展開」では、北海道大学関係者の移植民教育への関与を概観した。その際まず、新渡戸稲造と佐藤昌介の関与の仕方に対照的な側面を見出せることを指摘した。新渡戸は南洋への視察旅行をした 1910 年代半ば以降、商業権の拡大を移植民の目的にかかげた。そして東京植民貿易語学校の設立に尽力、拓殖大学の教育にも熱心に携わり、商業移民の養成を目指した。それに対し、佐藤ら北海道を拠点とする北大植民学の教員たちは、海外植民学校、日本植民学校、八紘学園でいずれも農業植民の養成にかかわって協力をしたのであった。

第二に、新渡戸の移植民教育論について、彼がこれから植民する者たちにどのような「人格」を望んでいたのか検討した。すなわち、新地を開発し現地人の生活を改良してゆく「覚悟」と、現地人に敵愾心を抱かず現地に適応してゆく「度量」であった。この両方が備わってはじめて、「帝国的精神」を持つ「一等国」の植民者として植民事業に成功することができると考えていた。次いで、佐藤昌介の移植民教育論・南米移民論についても検討した。佐藤は1920年代末には人口論に依拠した植民論の立場をとっていなかったこと、そして「植民地が植民地を造る」という言葉をキーワードに移植民活動のもつ進歩性にその意義を見出していたことを確認した。それゆえ、北海道開拓経験は南米移民へ向けて大いに役立つのであり、北海道民もまた南米へ向けて雄飛すべきと考えたのである。

最後に、北海道を一つの移植民学校と捉える議論についても取り上げた。高岡熊雄らがこの種の議論を高唱していたこと、それが特に日中戦争以降の満洲移民の中で様々なかたちで実践されていたことを指摘した。

以上ここまで検討し明らかにしてきたことから、本論文の意義を次の三点に要約できる。

第一に、1920 年代までの近代日本における拓殖教育を通史的にはじめて跡付けたことである。その結果、拓殖教育は大きく三つの時期において展開したことを指摘した。まず明治の早い段階において拓殖教育の前史ともいうべき北海道開拓のための人材養成が政府に

よってはじめられた。次に 1900 年を前後する時期になると、東京に本格的な移植民学校が設立されはじめる。「拓殖大学」に代表されるようにこれらの学校は台湾・朝鮮といった植民地への人材送出を目的とした学校であった。最後に、第一次大戦後にも南米向けの海外植民学校をはじめとして相次いで移植民学校が設立された。この時期は特に本来は移植民学校として設立されたわけではない学校までが拓殖教育に熱を入れはじめたことも特徴的である。また、北海道開拓のための学校は官立であったが、1900 年以降、移植民学校は基本的に民間によるものであった。1920 年代までの拓殖教育は民間によって担われてきたことを明らかにした。

第二に、近代日本の拓殖教育の形成・展開過程における北海道開拓の果たした役割を指摘した点である。まず第 1 章で示唆したように、札幌農学校出身者が近代日本の拓殖教育を担う主要な人材として活躍したことである。例えば志賀重昂は明治後期における拓殖教育論を展開した代表的論者であり、新渡戸稲造は「拓殖大学」の学監を務めた。佐藤昌介をはじめとする北大植民学の学者たちは海外植民学校、日本植民学校、八紘学園などを積極的に支援し、あるいは実際にその教育に携わったのである。こうして見たとき、札幌農学校は、その後本格的に形成されてゆく近代日本の拓殖教育においてその母胎の役割を果たしたと評価できるだろう。また第 5 章では、そうして発展した拓殖教育が後に北海道を舞台として、北海道自体を一つの移植民学校と捉える新たな展開を見せたことを確認しえた。

最後に、各章で扱った拓殖教育のなかに現れた「植民者」像に着目すると、近代日本における「植民者」像がそれぞれの時期に要請されるなんらかの理念を含有したものとして表明され、「植民」が奨励されてきたことが分かるだろう。北海道開拓の「植民者」像は、自然の富源と対ロシアの国防が主に期待された任務であった。したがって、そこで求めたのも土地の風土地理に対する知識であり、兵式教育であった。それが 1900 年頃になると、北米における排日運動が大きな課題であった。そこから西洋を参照軸として教訓を導きだすことによって、拓殖教育への要請はわきおこった。いっぽう同じ時期、日清戦争によって獲得した台湾で活動する者たちから起こった拓殖教育論は、植民地原住者をいかに懐柔するかを目的としていた。したがって、帝国民として文明的な態度で範を示すとともに、教育内容としては語学教育が最優先されることになった。次いで、第一次大戦後に入ると、南米への移民を養成する学校が現れ始めた。そこではアマゾンの大自然が開拓の対象であり、現地住民と争いの絶えない満州移民と対照され、平和の戦士と称された。最後に北海道における拓殖教育の展開をみると、「植民地が植民地を生む」という言葉で表されるとおり、北海道開拓経験がさらなる移民を誘発するものとして作用したのだった。そして特に満州移民送出の過程では、北海道自体が移植民学校として拓殖教育の舞台となった。このように、拓殖教育の展開とそこに現れる「植民者」像の変遷をおうことで、近代日本における「植民」をめぐる理念の歴史を跡付けることができるのである。

以上